

# 英国ヴィクトリア時代に活躍した風刺挿絵画家リチャード・ドイルの一書簡

著者	橘 セツ
雑誌名	神戸山手大学紀要
号	17
ページ	1-7
発行年	2015-12-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000638/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000638/</a>

# 資料紹介：英国ヴィクトリア時代に活躍した 風刺挿絵画家リチャード・ドイルの一書簡

A manuscript letter from Richard Doyle to Mr Dallas in circa 1868

橘 セ ツ

キーワード：リチャード・ドイル（1824–1883）、風刺挿絵画家、「日本風に描く」

keywords: Richard Doyle (1824-1883), artist and caricaturist, ‘draw à la Japanese’

## 要 旨

本稿では、英国の風刺挿絵画家リチャード・ドイル（1824–1883）による未刊行手稿の一書簡を翻刻して紹介する。本書簡は全文で478語あり、挿絵画家が1868年ごろに雑誌編集者宛に書いたビジネスレターである。本書簡は、挿絵画家リチャード・ドイルと編集者ダラスの間で挿絵を「日本風に描く‘draw à la Japanese’」ことについて議論されたという証拠であり、実現しなかったとはいえ、ジャポニズム流行に先だつ試みの一端を本書簡に見ることができる。

## I. 解題

本稿では、英国の風刺挿絵画家リチャード・ドイル（1824–1883）による未刊行の一書簡について資料紹介する。本書簡は、本稿の筆者が英国ヨークシャーにある古書店から2001年に購入した（Spelman, 2001）。書簡は、図1から図3の写真に示すように、縦17.6cm、横22.4cmの大きさの1枚の紙を二つ折りにして表裏の両面にペンで手書きされている。書簡が書かれている紙は二つ折りにして使用されているので、本稿では、便宜上、差出人の住所と宛名があり本文がはじまる冒頭の頁を1頁と呼び（図1）、見開きの頁を2～3頁（図2）、裏返した最後の頁を4頁（図3）と呼ぶ。この形態は当時の英国のレターペーパー（便箋）の使い方として一般的である。本書簡は全文で、478語あり、挿絵画家が雑誌編集者宛に書いたビジネスレターである。

ロンドンのジョン・マレー John Murray のような出版社が記録として組織的に保存していた編集者と作家の間の膨大な量の書簡のやり取りの連鎖を読み解いていくとヴィクトリア時代の出版ビジネスはどのように行われていたのかについての一端が理解できる（Keighren et al, 2015; Tachibana, 2014ほか）。本書簡は、当時の出版ビジネスを理解する上で、エフェメラルな断片であり、通常ならば用が済んだら破棄されるような小さなメモ書きであるが、たまたま捨てられずに生き延び、百数十年以上の年月を経て筆者の手に入ったかけらである。

以下に、1）書簡の差出人リチャード・ドイルについて、2）書簡の宛先の雑誌編集者ダラ

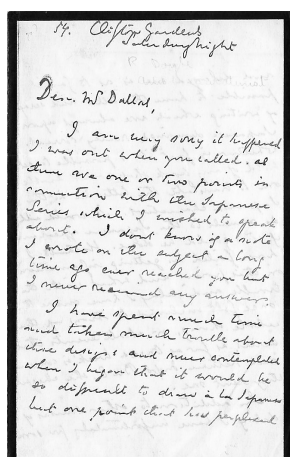


図1 Richard Doyle から Mr Dallas への手稿書簡の1頁目。書簡には日付はなく、黒枠が描かれていることから、差出人が喪中であることを示している。（筆者所蔵）

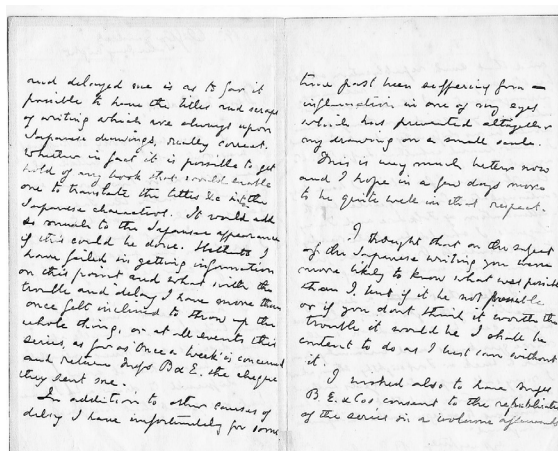


図2 Richard Doyle から Mr Dallas への手稿書簡の2～3頁目見開き（筆者所蔵）

スについて、3）書簡が書かれた時期についての推察、4）書簡の内容と意義について簡単に紹介する。

# 1）書簡の差出人リチャード・ドイル（1824－1883）について

本書簡の差出人リチャード・ドイル（1824－1883）の人生については、ロドニー・エンゲン Rodney Engen による『芸術家と評論家シリーズ 第二巻 *The Artist and the Critic Series, Vol.2*』としてリチャード・ドイル没後100周年の1983年に刊行された詳細な伝記をはじめ、富山太佳夫による「風俗と妖精の間に：リチャード・ドイル略伝」などでひろく紹介されている（富山, 1993a; 1993b; 2008）。これらの伝記では、リチャード・ドイルは英国で人気のあった絵入り雑誌『パンチ *Punch*』誌にかれが19歳の1843年から1850年まで表紙や風刺挿絵を寄稿したことが語られる。さらに、伝記は、かれが『パンチ』誌などで披露した時代風俗の一面面を捉えて絵画（風刺挿絵）で表現する卓越した能力を認めている。あわせて、ドイル家はアイルランドにルーツを持ち、多くの芸術家を輩出しているユニークな家の系譜であることにも触れられている。リチャード・ドイルは、『名探偵シャーロック・ホームズ』シリーズの作者として名高い推理作家コナン・ドイルの伯父でもある。

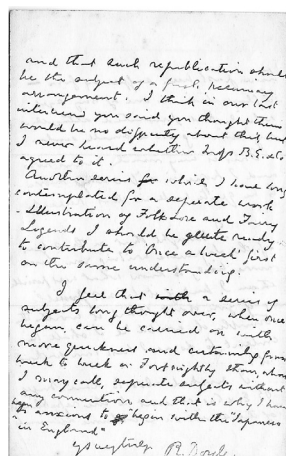


図3 Richard Doyle から Mr Dallas への手稿書簡の4頁目（筆者所蔵）

## 2) 書簡の宛先ダラスについて

この書簡の宛名は Mr Dallas となっている。この Mr Dallas という人物は書簡が書かれた当時には、本書簡で言及されている *Once a Week* というタイトルの雑誌の編集をしていた Eneas Sweetland Dallas (1828–1879) である。ダラスの略歴は、英国のオックスフォード国民伝記事典にも収められている。ヴィクトリア時代の英国では、雑誌の読者として一般大衆が加わり、人々が楽しみながら最新のニュースなどについて情報を得ることができる絵入りの週刊雑誌や新聞が次々と刊行されはじめた (Altick, 1957; 富山, 1993a; 1993b)。雑誌 *Once a Week* も、このような流れの中で1859年にあらたに刊行された絵入り週間雑誌であり、同誌は1880年まで刊行された。ダラスは同雑誌の編集に1869年7月まで関わっていた。

## 3) 書簡が書かれた時期についての推察

書簡の冒頭には 54 Clifton Gardens と差出人リチャード・ドイルの住所が記される。続いて ‘Saturday Night’ と書かれているが、日付は記されていない。編集者ダラスが訪問した時にリチャード・ドイルは外出中で会えなかったことへの詫びから書簡が書き始められていることから考えて、挿絵画家リチャード・ドイルと雑誌編集者ダラスの間は、書簡を出した日時を ‘Saturday Night’ と書けばお互いにいつのことか了解できるほど当時は両者の関係が密であったことが理解できる。また、当時のほかの編集者と作家たちの間の書簡のやりとりを調べてみても、‘Saturday Night’ などのように曜日と時間のみを書簡差出し日時として記している例も多くみられる (Tachibana, 2000; 2014)。

古書店の鑑定によると、書簡に使用されたレターペーパーの製造年は watermark により1867年製であることが明らかとなっている。したがって、書簡は、1867年以降に書かれたと考えられる。書簡の1頁目には、図1の写真のようにインクで黒枠が描かれている。これは差出人が喪中であることを示している。1867年以降で、リチャード・ドイルの近親者で亡くなっている人物がいなか調べてみると、リチャード・ドイルの父親、肖像画家・風刺画家であったジョン・ドイル John Doyle (1797–1868) は、1868年1月2日に亡くなっている (Engen, 1983)。当時の喪中の期間は通常では1年程度であった。以上の情報をあわせて考えると、本書簡は、おそらく1868年中に出されたものと推論できる。

1868年といえば、日本では、慶応4年かつ、明治元年を迎える年である。日本は鎖国をといて開国してまだ日が浅く、幕末・明治の激動の時代であった。1868年当時の英国における日本情報は、まだ乏しかった。1862年にロンドンのサウス・ケンジントンで開催されたロンドン万国博覧会においては、英国人の日本初代公使 R オールコックが日本で収集した日本の工芸品などが展示されたにすぎなかった。しかしながら、日本の工芸・芸術の緻密さは英国に新しいインパクトを与えた (Alcock, 1878; Watanabe, 1991; Tachibana, 2000 など)。

#### 4) 書簡の内容と意義について

本書簡が書かれたと推論される1868年には、リチャード・ドイルは44歳であった。父親から画業の英才教育を受け、早熟であったかれは19歳でプロの挿絵画家としてデビューしたので、1868年には、すでに26年のキャリアを持つベテランの挿絵画家であり、以降の活躍も期待されていた。これから本書簡478語の内容について紹介し、その意義について検討する。書簡の原文で分けられている7段落について、順に内容をみていこう。

第1段落 (55 words)：編集者グラスが訪ねてきた時にリチャード・ドイルは外出中であったことを詫びた後、グラスの来訪時にリチャードが相談したかったことは「日本のシリーズ ‘the Japanese Series’」に関連した1～2点であったことを述べている。そのことについて覚書 (a note) をしばらく前にグラスに送ったが、グラスからの返事がないのでそれを入手したのか確認をしている。

第2段落 (155 words)：第1段落で述べた「日本のシリーズ ‘the Japanese Series’」の挿絵について「日本風に描く ‘draw à la Japanese’」ことの進捗状況について述べている部分であり、分量的にも本書簡のなかで一番長い段落である。リチャードは、実際に描き始めるまでは、「日本風に描く」ことにまつわる困難さには思いいたらなかったが、その原因の一つは日本の文字 character の形状をデザインとして捉え、正しく描くことの難しさにあると分析して述べている。かれは挿絵のタイトルなどを日本風の文字で描きたいと考えているが、それを翻訳するために助けとなるような書籍はないかと編集者グラスに訊ねている。そのような書籍から情報を得ることができたならば、かれは日本風に見えるように挿絵を描くことができると主張する。だが、これらの情報がないならば、この企画をやり遂げることはかれには難しく仕事が遅れてしまうと主張する。かれは一度ならずとも、この企画全体あるいは、雑誌 *Once a Week* に関する限りは諦めてしまっ、Messrs B & E. 出版社が送ってきた小切手を送り返そうかとも考えたと述べる。この段落にでてくる Messrs B & E. とは、Messrs Branbury & Evans であり、雑誌 *Once a Week* の出版社である。また同社は、リチャード・ドイルの挿絵の掲載された書物のいくつかを刊行している。

第3段落 (54 words)：この段落は、挿絵の遅れの個人的な原因について述べ、弱音を吐いている部分である。リチャードは、眼に炎症を起こしたため、細かいスケールで描くという作業に困難をきたしていたと言い訳している。現在はかれの眼の炎症は改善していて、もう数日もすればより良くなると希望的予測を述べている。

第4段落 (51 words)：リチャードは、日本文字の書き方に関しては、グラスのほうがよく情報を持っているのではないかと再び訴えている。この日本風の文字を描く困難を克服することについて、他の書物などから日本文字についての情報を得ることができるのかどうか、あるいは情報が得られなかった場合には、それがなくてもより満足できるような仕事ができるのか、あるいはその苦勞をする価値のないものとして、諦めてしまったほうが良いのかについての判断について、編集者グラスに考えを問うている。

第5段落 (62 words)：この段落では、挿絵画家リチャードが編集者グラスに雑誌 *Once a Week*



にこの「日本のシリーズ」が掲載されたあとに通常行われる書籍化の再出版についても、あらたな金銭契約を行って欲しいと出版社 Messrs B & E. にかれの要望を伝えてくれたのか、契約は合意したのかについて確認している。

第6段落 (35 words)：この段落では、リチャードが同時進行で温めてきたもう一つの企画「フォークロアと妖精の伝説の挿絵 *Illustration of Folk Lore and Fairy Legends*」についての進捗状況について述べている。この企画もダラスの編集する雑誌 *Once a Week* の誌上で同じ理解で展開したいと希望を述べている。

第7段落 (53 words)：本書簡のまとめの部分である。リチャードは、挿絵について現在は熟考してすすめているが、実際に雑誌の挿絵の仕事に取り掛かるとより勢いを増して仕事をすすめることができると述べ、1週間毎、あるいは2週間毎に作品を持参して訪問すると希望を述べる。これらの2つの企画は別々のものであるが、まずは、「イングランドの日本人 “*Japanese in England*”」から取り掛かりたいと書簡を締めている。

以上、第1段落から第7段落まで書簡の内容を概観したが、結果から述べると本書簡で言及されているリチャード・ドイルの「日本のシリーズ ‘*the Japanese Series*’」あるいは「イングランドの日本人 “*Japanese in England*”」の企画はダラスの編集する雑誌 *Once a Week* の誌上で残念ながら実現しなかった。

そのかわり、第6段落でリチャードが述べている企画「フォークロアと妖精の伝説の挿絵 *Illustration of Folk Lore and Fairy Legends*」には、かれはより深く関わる。リチャードは、妖精伝説についての物語である Mark Lemon による *Fairy Tales* (1868)、*In Fairy Land* (1870)、さらに William Allingham や Andrew Lang による物語の挿絵などを次々と担当する。このように「フォークロアと妖精の伝説」をテーマとする挿絵はリチャード・ドイルが生涯にわたって追求するライフワークとなっている。妖精画や妖精物語はヴィクトリア時代の英国において一つの愛好されるジャンルとなっていた (Silver, 1999)。このような妖精が描かれたリチャード・ドイルの挿絵は、最近でも、日本語に翻訳され愛好者を獲得している (アリンガム (ドイル, R 絵, 矢川澄子訳, 1988; ラング (ドイル, R 絵, 安岡みゆき訳), 2010など)。

いっぽう、書簡で言及されながらも、実現しなかったリチャード・ドイルの「日本のシリーズ ‘*the Japanese Series*’」あるいは「イングランドの日本人 “*Japanese in England*”」の企画で目指した日本趣味の方向も、英国においてリチャード・ドイルが述べていた「日本風に描く ‘*draw à la Japanese*’」ことの困難さを克服し、あるいはアレンジされながら徐々に流行し、1880年代以降世紀末に、ジャポニズムの文化潮流を形成する (馬淵, 1997; 小野, 2008)。リチャード・ドイルが挿絵を「日本風に描く ‘*draw à la Japanese*’」ことに思い悩んだ1868年の試みは日本についての情報がまだ乏しいなか先駆的であった。本書簡は、実現しなかったとはいえ、挿絵画家リチャード・ドイルと編集者ダラスの間で挿絵を「日本風に描く ‘*draw à la Japanese*’」ことについて、挿絵画家と編集者のビジネスの現場で議論されていたというささやかな証拠であり、後のジャポニズム流行の先駆となる試みをここにみることができる。次章では、書簡の全文を資料

資料紹介：英国ヴィクトリア時代に活躍した風刺挿絵画家リチャード・ドイルの一書簡

紹介として翻刻する。

凡例：本文の段落分けは、書簡の原文通りに行った。大文字・小文字についても、書簡の原文に従った。withなどと字句訂正された場合も、手稿書簡の原文通りに翻刻を行った。

## Ⅱ．風刺挿絵画家リチャード・ドイルの一書簡の全文翻刻

54 Clifton Gardens,  
Saturday Night

Dear Mr Dallas,

I am very sorry it happened I was out when you called, as there are one or two points in connection with the Japanese Series which I wished to speak about I don't know if a note I wrote on the subject a long time ago ever reached you but I ever received any answers.

I have spent much time and taken much trouble about these designs and never contemplated when I began that it would be so difficult to draw à la Japanese but one point that has perplexed and delayed me is as to far it possible to have the titles and scraps of writing which are always upon Japanese drawings, really correct. whether in fact it is possible to get hold of any book that would enable me to translate the titles &c into the Japanese characters. It would add so much to the Japanese appearance if this could be done. Hitherto I have failed in getting information on this point and what with the trouble and delay I have more than once felt inclined to throw up the whole thing, or at all events this series, as far as 'Once a Week' is concerned and return Messrs B & E. the cheque they sent me.

In addition to other causes of delay I have unfortunately for some time past been suffering from inflammation in one of my eyes which has prevented altogether my drawing on a small scale. This is very much better now and I hope in a few days more to be quite well in that respect.

I thought that on the subject of the Japanese writing you were more likely to know what was possible than I, but if it be not possible or if you don't think it worth the trouble it would be I shall be content to do as I best can without it.

I wished also to have Messrs B.E. & Cos consent to the republication of the series in a volume afterwards and that such republication should be the subject of a fresh pecuniary arrangement. I think in our last interview you said you thought there would be no difficulty about this, but I never heard whether Messrs B.E. & Co agreed to it.

Another series for which I have long contemplated for a separate work — Illustration of Folk Lore and Fairy Legends I should be quite ready to contribute to 'Once a Week' first on the same understanding.

I feel that with a series of subjects long thought over, when once begun, can be carried on with

more quickness and certainty from week to week or fortnightly than, what I may call, separate subjects without any connection and that is why I have been anxious to begin with “Japanese in England”.

Yours very truly R. Doyle

## 付記

古書店 (Ken Spelman) によると、現在、British Library に所蔵されている Richard Doyle の1869年の Gladstone あての書簡 (Add MS 44420, ff.316-317b.) と本書簡は同じ住所から出されており、同じ筆跡であると鑑定されることから考えて、本書簡は Richard Doyle による本物の書簡であると考えてまず間違いのないことである。筆者は、本資料について有益な情報を提供していただいた Ken Spelman のスタッフに深謝する。

## 参考文献

- アリンガム, W. (ドイル, リチャード絵, 矢川澄子訳, 1988) 『妖精の国で』 ちくま文庫
- 小野文子 (2008) 『美の交流: イギリスのジャポニズム』 技報堂出版
- 富山太佳夫 (1993a) 「風俗と妖精の間に: リチャード・ドイル略伝」 (p.9-42)、ドイル, リチャード (富山太佳夫編訳, 1993a) 『挿絵の中のイギリス』 弘文堂
- ドイル, リチャード (富山太佳夫編訳, 1993a) 『挿絵の中のイギリス』 弘文堂
- 富山太佳夫 (1993b) 『シャーロック・ホームズの世紀末』 青土社
- 富山太佳夫 (2008) 『英文学への挑戦』 岩波書店
- 松村昌家編 (1994) 『『パンチ』素描集: 19世紀のロンドン』 岩波文庫
- 馬淵明子 (1997) 『ジャポニズム: 幻想の日本』 ブリュッケ
- ラング, アンドリュウ (ドイル, リチャード絵, 安岡みゆき訳, 2010) 『誰でもない王女さま』 レベル
- Alcock, Sir Rutherford (1878) *Art and Industries in Japan*, Virtue and Co. London.
- Altick, Richard D. (1957) *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public 1800-1900*. The University of Chicago Press.
- Chartier, Roger, Boureau, Alain and Dauphin, Cecile. (1997) (translated by Woodall, Christopher) *Correspondence: Models of Letter-Writing from the Middle Ages to the Nineteenth Century*. Polity Press.
- Engen, Rodney (1983) *Richard Doyle (The Artist and the Critic Series, Vol.2)* Catalpa Press Ltd.
- Keighren, Innes M.; Withers, Charles W.J., and Bell, Bill (2015) *Travels into Print: Exploration, Writing, and Publishing with John Murray, 1773-1859*. University of Chicago Press.
- Silver, Carole G. (1999) *Strange and Secret Peoples: Fairies and Victorian Consciousness*. Oxford University Press.
- Spelman, Ken (2001) *Catalogue 45: Recent Acquisitions Rare & Antiquarian Books*, Ken Spelman Rare Books.
- Tachibana, Setsu (2000) *Travel, Plants and Cross-cultural Landscapes: British Representation of Japan, 1860-1914*. Unpublished PhD thesis submitted to the University of Nottingham
- Tachibana, Setsu (2014) ‘Contested Geographical Knowledge and Imagination: A.H. Savage Landor and Victorian British Writings on Hokkaido’ in Edited by Shimazu, T. (2014) *Languages, Materiality, and the Construction of Geographical Modernities: Japanese Contributions to the History of Geographical Thought (10)*, Wakayama University, p.9-28
- Watanabe, Toshio (1991) *High Victorian Japonisme*, Peter Lang. Bern.